

2023年度

国語入試問題

(2023年2月4日実施)

座席番号									
------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

[注意]

1. 試験監督者の指示があるまで、問題冊子や筆記用具に触れないでください。触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。
2. 試験中の使用が認められたもの以外は、すべてカバンに収納すること。使用用具は、黒鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り（手動式・小型に限る）とし、それ以外の使用は認めません。
3. 携帯電話、スマートフォン、イヤホン、ウェアラブル端末、電子辞書、ICレコーダーなどの電子機器類は、必ず電源を切ってから、カバンに収納すること。
4. 試験開始の合図により、試験を始めてください。
5. 解答は、すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。
6. 試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置いてください。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで、絶対に席を立たないでください。
7. 問題冊子および解答用紙は、試験終了後にすべて回収するので、持ち帰ってはいけません。

問題Ⅰ

次の文章は、平木典子『アサーションの心 自分も相手も大切にするコミュニケーション』の一部である。筆者は「アサーション」について、「コミュニケーション・スタイルの一つ」であり、「自分と他者の人権を侵すことなく、自己表現すること」だと考えている。これを踏まえて、後の問いに答えなさい。

人が新たな情報に触れ、ものの見方や行動が変わるとき、脳では変化が起きている。外から入ってきた情報がすでにある知識と相互作用し、考えるところという作業が始まり、新たなものの見方や考え方に再生されていく。考えることによって再生された見方は世界の見方や意味づけを変え、言動に変化をもたらす。一方、新たな情報が単なる知識のための情報にとどまったり、**ア**の考え方によって役に立たないと判断されたりすると、変化は起こらない。

心理学ではこのような脳の活動を「認知」と呼ぶ。認知は、ものごとを知り、覚える活動だけでなく、情報の意味や価値を評価し、取捨選択する機能を持っている。ものの見方や考え方が変わったり変わらなかつたりするのは、個人によって情報処理活動が異なるからである。たとえば、弱い体質の人は強い人に比べて病気にかからないよう留意して過ごそうとし、その習慣が身につく。その結果、「健康に留意して生活することは大切だ」という考え方が形成され、その人の生活規範となり、ときには価値観や信念になる。

人がものの見方、考え方を形づくるには認知活動が関わっており、その結果、個人の認知や行動の特徴が出てくるという見方である。この認知形成の原則は、個人の独自性や自立性、個性を重視する考え方や生き方を、(a)シヨウレイすることにつながる。

一方、ものの見方は、幼いころからの周りの人びととの交流の中で(b)ツチカわれていくという考え方もある。親や教師は、自分たちにとって役に立つことばやものの見方、考え方を子どもや人びとに伝え、その共同体の標準原則を身につけさせる。各自が所属する社会で無事に生きていくには、生まれ育った家族の習慣や特定の学校や職場の規範を取り入れ、その集団のものの見方に沿ってものごとを理解し、行動する必要がある。人がその社会に適応するには、所属集団や社会から、(1)ものの見方や振る舞い方を学び、その基準で動くことが必要で、特定の社会のメンバーとして生きていくには、その社会のものの見方や考え方に倣うことがイだと考えるのである。

この考え方に従うと、先人の知恵や社会の規範は重要なものごとの判断基準であり、それなくして社会の安定や平和は維持できないことになるだろう。

以上二つの観点は、それぞれ納得がいく。そして、前者の考え方をしている人びとや国では、**A**がより広く行き渡り、**B**が強い後者は、**C**を重視するだろう。

しかし、いずれの考え方も極端になると、(2)現実的ではなくなる。自立を強調しすぎると自分勝手になりかねず、伝統と安定を重視しすぎると個人が押しつぶされていく。今、私たちは、その二つの考え方が極端になってぶつかり合い、いずれかを主張する人びとや国ぐにが激しく対立する姿を目にしている。

ただ、身近な落ち着いた人間関係の現実を見ると、人はそれぞれが持つて生まれた個性と生まれ

育った社会の規範との関わりの中で、おののものの見方や価値観をつくり上げ、それをベースにしてものごとに対処しているように思われる。私たちは個人を大切にすることも社会を大切にすることも両立させたいのではないだろうか。

I、個人を大切にすることも、共同体の安定を重視するにしても、結果としては、人は自分と社会がつくった自分のメガネをかけて世界を見ており、それを通してものごとを判断し、人間関係をつくり、生活していると考えていいのではないか。ということは、⁽³⁾人は同じものを見て、同じ情報を聞いても、異なった理解の仕方や意味づけをすることである。

II、人びとがこの現実を明確に意識したのは比較的最近のことであり、多くの人はまだ、同じ情報が伝えられれば、同じように理解されると思っている。また、^(c)ヤツカイなことに、素直に関わり、正直に話し合いをすれば、自分と相手にはそれぞれ独自のメガネがあることに気づくのだが、一方のメガネから見える風景のみが真実だとして、相手が間違っていることにしがちである。

^(d)アサーティヴになりたい気持ちがあるとき、「変わった行動をとると、好かれない」という考え方がサマタげになっていたら、その考え方はどこで身につけ、誰から学んだか思い出してみるとよい。また、その考え方をすると自分らしさが発揮されるかどうかも考えてみよう。押しつけられたものだったら、今もそれが必要か、自分に合っているか、その考え方をすることで自分を苦しめていないかを自分に問いかけてみよう。同時に、自分がアサーティヴになったら支えてくれそうな人がいたか、今、いるかも、ふり返ってみよう。

そのプロセスでは次のような自己説得が起るかもしれない。「これまでと変わった行動をすると、驚く人がいるだろうし、私を嫌いになる人もいるかもしれない。でも、私を嫌いになる人がいても、それはその人の好みだから、任せるしかない。アサーションができたことで好きになってくれる人が現れる可能性はある」と。それが自分にふさわしい考え方だと思えることができれば、その考え方を大切にして過ごすとよい。アサーションを実行するチャンスをつかまえることができるだろう。

もし自分の考え方が自分や他者に対して「べきだ」「はずだ」「当然だ」「当たり前だ」と決めつけるような言い方になっていたことに気づいたら、「そうだろうか。ほんとうに当然か?」とか、「自分の考え方は必ずしも万人に通じる真理ではないのか?」と自分に問うてみるとよい。そうすると、自分を罰するような考え方は減り、願望と命令は区別され、自分や他者に対して寛容になり、表現もアサーティヴになる可能性が高まる。自分にふさわしい考え方に変えれば、自己信頼も高まり、アサーションをしやすくなる。

以上述べた方法は、自分で自分の考え方を変える方法である。それは III 自分の考え方とは異なった考え方を自分にぶつけてみて、自己説得のアサーションを試みることになる。

私たちのものの見方は社会的関係の中でつくられるのだから、ものの見方を変えるにも社会的関係が必要である。つまり、他者との関わりの中で、ものの見方が変わる体験をすることである。先に、トレーニングではグループの話し合いをすると述べたのは、その試みの一つである。

そのプロセスをたどると、自分のメガネの色はどの人の前ではどのような色になり、相手がどのように受け取るかは、人との関係を持つときにわかる。⁽⁴⁾ある人の前では、薄緑と濃い緑の差だったり、

他の人の場合は緑とピンクだったりする。話し合うにしたがって、両方の色が変わっていくのを体験することもある。Ⅳ、具体的に誰かに自分を開示し、その色を確かめながら、全員が変わっていくことが現実的なのである。

私たちは誰かとのコミュニケーションを通して変化し続けていて、考え方も価値観もそこでつくられていく。自分のことばや考え方は受け手の考える作業を刺激し、相手の中で再生された反応が戻ってくることで自分の考える作業が刺激される。その相互作用がくり返されて、新たなものの見方や意味が作り出される。その新たな意味は共同生成されたものなので、もはや誰かのものではなく、その関係だけが作り出し、共有された新たな意味を持つ。

Ⅴ、「悲しい」ということばは、それだけでは辞書の^(e)「テイギ」以外の意味はない。しかし、そのことばが人間関係の中でどのように用いられるかによって、当事者たちにとっての「悲しみ」や「悲しさ」の意味が作り出される。

厳密に言えば、私たちが使うことばや文章は「事実」を表現しているのではなく、そのことばに託した意味を運んでいるので、その意味を受け取る人がいて、つまり関係というものを通すことで、初めて関係の中で意味が作り出される。逆に言えば、ある人が発したことばは相手の理解の枠でとらえられるので、異なった意味に受け取られることがあるが、それも関係が生み出す違いを意味している⁽⁵⁾のであり、そこから⁽⁵⁾あらたな意味の探索が始まると言えるだろう。

私たちが暗黙の合意に従った共通のことば（たとえば日本人なら日本語）やものの見方を土台にして意味を伝達しようとするとき、意味の生成はよりスムーズに進む。ことばや文化が異なる人どうしの理解はもつと困難だろうが、メガネの色に違いがあることを忘れず、意識してコミュニケーションをするならば、ことばと考え方はその関係の中で意味を持ち、新たな展開が期待できる。

そして考え方の違いをプラスに活用する方法は、自分も相手も大切にすることをアサーションだということに行き着く。

(注) アサーティヴ……積極的な様子。自分の意見や感情をはっきりと示す様子。

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

- (a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4、(e) 5。

(a) ショウレイ 1

- ① 選手たちをゲキレイする。
② 過去のボウレイにおびえる。
③ レイラクした旧家に生まれ育つ。
④ アスリートがカレイな演技を見せる。
⑤ かつて農民は地主にレイゾクしていた。

(b) ツチカわれて 2

- ① 損害バイショウを請求する。
② バイシン員の召喚に応じる。
③ 株のバイバイに必要な書類を用意する。
④ 細菌のバイヨウに成功する。
⑤ テレビというバイタイを通して宣伝する。

(c) ヤツカイ 3

- ① 新商品の開発でヤクシンする。
② できるだけ逐語的にヤクシユツする。
③ 料理にネギなどのヤクミを使う。
④ 思いがけないヤクナンに遭遇する。
⑤ 取り引きにあたってケイヤクを交わす。

(d) サマタげ 4

- ① 災害に備えて効果的なボウビを考える。
② 雑用にボウサツされて読書ができない。
③ 絶え間ない騒音が作業をボウガイした。
④ 生物部の活動でカイボウの基礎を学ぶ。
⑤ 感情のボウハツを抑える方法を学ぶ。

(e) テイギ 5

- ① 新しい方針についてギカイで話し合う。
② 行政の不誠実な対応にギフンを感じる。
③ 昔ながらの盛大なギシキが行われた。
④ 罪のない人びとがギセイになつてはならない。
⑤ 知人のためにいろいろとベンギをはかった。

問2 空欄「ア」・「イ」に入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、ア 6、イ 7。

ア 6 ① 練達 ② 新規 ③ 専心

④ 公共 ⑤ 既存

イ 7 ① 必至 ② 必須 ③ 必携

④ 必修 ⑤ 必死

問3 傍線部(1)「もの見方や振る舞い方」とあるが、人が「もの見方や振る舞い方」を身につけたり学んだりすることについて、筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、8。

① 人はもの見方や振る舞い方を個人的な認知によって身につけたうえで、その後集団や社会から学び直すことになる。

② 人がもの見方や振る舞い方を身につける方法には、個人的な認知によるものと、集団や社会から学ぶものとの二種類が並存する。

③ 人は個人的な認知によってももの見方を身につけることができるが、もの見方と振る舞い方を調和する方法は集団や社会から学ぶ。

④ 人は、個人としてのもの見方や振る舞い方を認知から、共同体の一員としてのもの見方や振る舞い方を集団や社会から身につける。

⑤ 自立性や個性を重視する人は認知からもの見方や振る舞い方を身につけるが、社会の安定や平和を重視する人は集団や社会から学ぶ。

問4 空欄 A) C に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選
びなさい。解答番号は、 9 。

- ① A Ⅱ 共同体の安定を願う気持ち
B Ⅱ 集団の規範やルールを尊重する気持ち
C Ⅱ 個人を大切にすることを考える
- ② A Ⅱ 共同体の安定を願う気持ち
B Ⅱ 個人を大切にすることを考える
C Ⅱ 人がその個性を十分にのばすこと
- ③ A Ⅱ 個人を大切にすることを考える
B Ⅱ 集団の規範やルールを尊重する気持ち
C Ⅱ 人がその個性を十分にのばすこと
- ④ A Ⅱ 個人を大切にすることを考える
B Ⅱ 自立性や個性を重視する気持ち
C Ⅱ 集団の規範と個人を調和させること
- ⑤ A Ⅱ 個人を大切にすることを考える
B Ⅱ 共同体の安定を願う気持ち
C Ⅱ 集団の規範やルールを守ることを

問5 傍線部(2)「現実的ではなくなる」の、本文における意味として最も適当なものを、次の中から
一つ選びなさい。解答番号は、 10 。

- ① 現実とはなんら関係を持たない架空の存在となる。
- ② 現実が起こっている人間や国家の状況を説明できなくなる。
- ③ 現実の人びとの生活や国家間の交渉が想定しづらくなる。
- ④ 現実の世界に適用しようとするの不都合が生じる。
- ⑤ 現実の問題を解決するための理念とは別のものになる。

問6 空欄 には次のア～オのいずれかの語句が入る。その組み合わせとして最も適当なものを、後から一つ選びなさい。解答番号は、。

ア つまり イ たとえば ウ そして エ したがって オ ところが

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|----|---|-----|---|----|---|---|---|
| ① | I | エ | II | オ | III | イ | IV | ウ | V | ア |
| ② | I | オ | II | ア | III | イ | IV | ウ | V | エ |
| ③ | I | ウ | II | オ | III | ア | IV | エ | V | イ |
| ④ | I | オ | II | ウ | III | ア | IV | イ | V | エ |
| ⑤ | I | ウ | II | エ | III | ア | IV | オ | V | イ |

問7 傍線部(3)「人は同じものを見て、同じ情報を聞いても、異なった理解の仕方や意味づけをする」とあるが、筆者はこのことについてどのように考えているか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① このことにまだ気づいていない人が多いし、気づいても正しい理解の仕方や意味づけは一つしかないと思っている人もいる。
- ② このことをまだ認めようと思わない人が多いし、それを主張する人に対して間違っていると指摘する人も多く存在する。
- ③ このことを最近になって主張し始めた人びとの間には、その主張だけが真実だとして他の主張を認めない傾向が見られる。
- ④ このことは、個人を大切にしている人びとと共同体の安定を重視する人びとの主張がぶつかり合った結果、知られるようになった事実だ。
- ⑤ このことは、個人を重視する考えと共同体の安定を重視する考えの矛盾が解消したことで、知られるようになった事実だ。

問8 傍線部(4)「ある人の前では、薄緑と濃い緑の差だったり、他の人の場合は緑とピンクだったりする。」とは、どういうことを表しているか。次の文の にあてはまるように、三十字以内で説明しなさい。解答番号は、。

自分と相手の ということ。

問9 傍線部(5)「あらたな意味の探索」の説明として正しくないものを、次の中から一つ選びなさい。

解答番号は、14。

- ① あることばについてそれまで自分が抱いていたものとは異なるニュアンスの意味を探ること。
- ② あることばについて相手が抱いていたものとは異なるニュアンスの意味を一緒に探ること。
- ③ 辞書に載っている説明では包摂されないニュアンスを持ったことばの意味を探ること。
- ④ 自分と相手が一つのことばに抱いている考えの違いによって何をすべきかを探ること。
- ⑤ 自分と相手間関係を持ったことで、ことばの意味にどのような違いが生じるかを探ること。

問10 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、15。

- ① アサーションを実践することによって、どんな言語を話す人との会話においても、ことばや考え方の違いを乗り越えて同一の認識に至ることができる。
- ② 個性を大切にする人は、情報の受け取り方は人によって異なるという考えになじみやすいが、共同体の安定を重視する人は反発を感じがちである。
- ③ アサーティヴになりたいという気持ちから、これまでの自分にはない考え方を自分につけてみることは、既に一つのアサーションであると言える。
- ④ 個人の独自性や自立性、個性を重視する考え方や生き方が世界に広まった結果、現在では個人と個人の対立や国家間の対立が激しさを増している。
- ⑤ 私たちのものの見方は社会的関係の中でつくられるものであるから、考え方や価値観の変化も社会の中での他者との関わりなくしては生じない。

問題Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

指揮者はオーケストラが鳴らす音を聴きながら、常に三つのことを同時に判断していなければならぬ。

まず、これから何を鳴らすかという指示。それは振り上げた腕が降りてくる瞬間、次はどこに行くかという方向性を与える。

そうした動きをしながら、耳は今その瞬間に鳴っている音に対して反応しなければならない。

そして三つ目、実際にどういう音が鳴ったという過去を知らなければ、次につくる音楽が組み立てられない。

未来と現在と過去、この三つを瞬時に判断するのは当然、目ではなく、耳だ。この三つが入り組んで、音に酔ってしまうと、いい音楽はつくれぬ。だから、たとえ指揮台の上で飛んだり^(a)ハねたりしていても、指揮者は二重人格、三重人格のように、どこかで ア 耳を持っている必要がある。

そして、最も指揮者にとって大切なのは、⁽¹⁾「自分の音」を実際にどう鳴らすかだ。

僕は二〇代の終わりから三〇代にかけてヨーロッパや日本で、指揮者としての「自分の音」を求めて成功と失敗を繰り返した。自分の音をどうオーケストラに伝え、表現するか。指揮者として成長するために、その一〇年間はとても大きかった。

音楽は空気を振動させて鳴る音ではない。作品に仮に「水」という標題がついていたとしても、結局それは音の連なりでしかない。自分が作品に一步踏み込み、作品が自分に近づいてきたとき、ある情景、イメージが立ち上がる。それをオーケストラに伝えるとき、言葉にして伝えることがとても大切になる。

たとえば、^(準)ブラームスの「交響曲第四番」。第一楽章は、ヴァイオリンの「トシソ―ミド」という三度下降に休符を挟んで六度上昇する、とても繊細な主題から始まる。演奏を重ねていくと、一つのイメージが自然に浮かび上がってくる。

「一人の^(b)キフジンを舞踏会にエスコートするとき、指揮者の僕が差し伸べた手の上にそっと女性の手が重なってくる。手が重なったその瞬間に音を鳴らしたい」

そんなふうにオーケストラに伝える。ヴァイオリンには、こちらが静かに合図を出したら、いつ出てもいいと指示している。ヴァイオリンが歌い出すのを待って、次の拍に入る。そして哀切にして高雅なメロディーが奏でられる。

弦が出るタイミングをこちらが出してしまうと、オーケストラは想像することをやめる。わかりやすく言うと、「せーのー、はいー」とタイミングを出すところを、指揮者が「せー」だけを言う。

「のー」は、演奏者みんなが自分の中で感じとり、それぞれに始まる。集中して丁寧に。 I

ここで大事なのはオーケストラの想像力だ。もしもオーケストラに想像力がなく、それぞれが演奏に消極的にしか参加しなければ、決していい音は鳴らない。だからこそ指揮者はオーケストラの想像力呼び起こすように、イメージを言葉で表現して伝える必要がある。 II

たとえば、一つの静かなフレーズも、それが透明感のある静けさなのか、安らぎをたたえた^(c)オダ

やかな静けさなのか、あるいは爆発前の何かを秘めた静けさなのか、的確に表現して伝えることが求められる。

III

僕が尊敬する指揮者カルロス・クライバー（一九三〇～二〇〇四年）は、リハーサルで音づくりを指示するとき、「夢のような話をして、何を言っているのかわからなかった」そうだ。かつてクライバーのもとで演奏した奏者たちにそう聞かされた。たとえば、

「そこは、クリスマスプレゼントのおもちゃをどうしてもほしい子どもが、買ってもらえなくて、駄々をこねているような感じで……」

本当か嘘か、⁽²⁾ 練習の三分の二がそんな感じだったらしい。

IV

演奏者はいわば職人である。だから、具体的に音を短くすればいいのか、長くすればいいのか、どれくらいテンポを上げればいいのかを知りたがる。

とはいっても、みんながみんな、具体的に説明的な指示を待っているわけではない。抽象的なイメージの表現がすくと **I** 落ちる演奏者もいる。 **V**

カラヤンのリハーサルで **A** だったのは、弦楽器奏者に対して、あるフレーズを弾くために「弓を二センチしか使ってはいけない」と指示したときだった。きわめて **B** ではあるが、一方で ⁽³⁾ それはあり得ないこともある。

しかし、カラヤンはあえてそう言った。そして、そう指示した後に、実際に振ってみると、そっと耳打ちしているように繊細な音が鳴ったのである。

そんなふうに演奏者への指示をイメージとして伝えることは、ときに **C** なはたらきをする。しかし、ヨーロッパのオーケストラ相手に言葉の壁があった僕の場合、最初はそこでずいぶん苦労した。

音の鳴らし方を言葉で求める場合、たとえば「悪魔のような音がほしい」「賛歌のように吹いてくれ」「もつとフレッシュな音にしてほしい」と言う。

あるいは「そのアクセントは、レモンを切って、そのしぶきがパッと、こちらにかかるくらいの強さがほしい」とイメージを伝える。

そういう抽象的な表現をする場合、僕はそれに加えて「これくらい息のスピードを速くしてほしい」とか、「弓の先の部分を使って」とか、できるだけ具体的な奏法まで指示するように心がけている。

あるいは「ここで祈りを捧げる^{stacc}ような音がほしい」と求めたときは、たとえばドミソの和音のうち「ドとソの音を少し強調してほしい。ミはそのまま自分で自分がいちばん心地いいところだ！」と言う。

そうして、もしみんなが祈りを捧げるような気持ちになれたとしたら、その練習はすごくうまくいったということになる。

練習でうまくいったものが、本番で思ったようにいかないことは、たまに起きる。逆に練習は未消化のまま終わったにもかかわらず、本番で会場にお客さんが入った ^(d) トタン、何もかもうまくいくこともある。

練習はあくまでも種に水をまいているようなもので、どういう大きさで、どういう色の花が咲くか

は、予想はしていても、実際は咲いてみなければわからない。それは音楽の世界では、ごく自然のことである。

つまり何が成功に結びつき、何が失敗の原因となるかわからないところが、生の演奏会の面白味でもある。

一九七七年、⁽⁴⁾カール・ベーム（一八九四―一九八一年）がウィーン・フィルを率いて来日したときのことだ。アンコールでベートーヴェンの「レオノーレ序曲第三番」を演奏した。

後半、単純な箇所でもベームがあいまいな指揮をして、戸惑った弦楽器群の足並みが乱れた。天下のウィーン・フィルの音が揃わずに、ずれて鳴ったのだ。

その瞬間、オーケストラのメンバーの顔色がぱっと変わった。NHKのテレビ中継を見ていた僕は、その瞬間を鮮明に覚えている。オーケストラの一大事がこちらに伝わってきた。

その直後のプレスト（きわめて速く）は、弦楽器の早弾きが求められる難しい箇所だが、もう爆発的な演奏だった。オーケストラが音の塊になって聴く者を圧倒した。一つのミスをきっかけに、オーケストラの集中力が瞬時に高まったのだ。

音がずれることは、どうでもいいといえどもいい。その後の爆発的なプレストを聴けたよるこびは何ものにも代えがたかった。

演奏会はサーカスの綱渡りに似ている。綱を渡るパフォーマーが綱から落ちてしまつては困るが、絶対落ちないとわかっているのもつまらない。落ちそうで落ちない、サーカスの面白さは、そのハラハラドキドキのスリリングな緊張感にある。

演奏会でいえば、もちろん演奏が破綻してはいけない。では、安定していればいいかというと、これもまた面白くない。言ってみれば、指揮者はオーケストラに綱渡りをやらせているようなものなのだ。

だから僕はたとえば、あらかじめオーケストラに「本番はリハーサルよりもテンポを上げる」と伝えておき、本番ではオーケストラが予想した以上のテンポで演奏し、どんどんオーケストラを追い込んでいく。

そうかと思えば、予想以上にゆっくりと振り、あと糸一本、皮一枚のところまでテンポを落とす。

⁽⁵⁾小澤先生はそれを、こんなふうに表示した。

「オーケストラの指揮は車の運転のようなものだ。周囲に気を配りながらハンドルを微調整しつつ、オケが崩れそうになる瞬間を聴き取り、それが現実になる前に手を差し伸べる」

その喩えでいえば、指揮者は演奏者たちのエンジンを最もいい状態に導いていき、これ以上テンポを上げたら、オーバーヒートしてアンサンブルがバラバラになる、これ以上テンポを^(e)オソくしても、エンストして止まるという境界線を進んでいく。

そこはオーケストラとの勝負であり、駆け引きである。あるいは、それは緊張と緩和のコントロールとも表現できる。

（佐渡裕『棒を振る人生 指揮者は時間を彫刻する』）

(注1) ブラームス……ヨハネス・ブラームス。ドイツの作曲家、ピアニスト（一八三三～一八九七）。

(注2) カラヤン……ヘルベルト・フォン・カラヤン。オーストリアの指揮者（一九〇八～一九八九）。

(注3) 小澤先生……小澤征爾^{おざわせいじ}。日本の指揮者（一九三五～）。

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

(a) 16、(b) 17、(c) 18、(d) 19、(e) 20。

(a) ハね

16

- ① 体操のチヨウバで金メダルを獲得した。
- ② 陰口など気にせずにチヨウゼンとしている。
- ③ ダンチヨウの思いで参加することを諦めた。
- ④ 葬式で友人代表としてチヨウジを読んだ。
- ⑤ 秋のチヨウメイな空気を胸いっぱいに吸う。

(b) キフジン

17

- ① 祖母のキジュを祝って親戚一同が集まった。
- ② わがクラブの歴史はまばゆいコウキを放っている。
- ③ 原料のトウキのため値上がりした。
- ④ 不要な資材を全部まとめてハイキする。
- ⑤ タキにわたる研究テーマから一つを選ぶ。

(c) オダやか

18

- ① 善良でオンジュンな人柄が人びとから愛された。
- ② 中学時代のオンシの言葉を今でも思い出す。
- ③ 満たされぬオンネンを描いた暗い作品だ。
- ④ 部屋の中にはフォンな空気が満ちていた。
- ⑤ 会社名にオンチュウを添えて送付する。

(d) トタン

19

- ① トシンのマンションで暮らしている。
- ② この様子では弟のゼントが案じられる。
- ③ 医師が患者の患部に軟膏をトフする。
- ④ 夜空にあるホクト七星を見つける。
- ⑤ 友人に向かって心情をトロする。

(e) オソク

20

- ① ヨウチな言動はやめて、もっと大人になりなさい。
- ② 緊急時に備えて万全のソチをとっている。
- ③ その国はかつて英国にトウチされていた。
- ④ 彼の計画はチミツに立てられていた。
- ⑤ 工事がこれ以上チエンしないよう手を打つべきだ。

問2 空欄 ア・イ に入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、ア 21、イ 22。

ア 21 ① 鷹揚おつような ② 憤おこった ③ 諦あきらめた

④ 弾はじんだ ⑤ 冷めた

イ 22 ① 語るに ② 問うに ③ 地に

④ 腑はらに ⑤ 畏おそみに

問3 傍線部(1)「『自分の音』」とあるが、筆者が考える「『自分の音』」とはどのようなものか。その

説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。

- ① 作品のタイトルを解釈することで浮かぶイメージに近いもので、まだ現実化していない音。
- ② 作品に入り込んだときに浮かんできたイメージに合うもので、まだ心の中だけにある音。
- ③ 空気の振動にすぎない現実の音に自分のイメージを重ね合わせた音で、想像上のもの。
- ④ 作品のタイトルを解釈することで浮かぶイメージに近いもので、演奏によって実現された音。
- ⑤ 作品のイメージを空気の振動である音に託した音で、演奏によって現実化したもの。

問4 次の文は本文の一部である。どこに入れるのが最も適当か。本文中の I、V の中から一つ選びなさい。解答番号は、24。

指揮者もいろいろだが、演奏者も一様ではない。

- ① I
- ② II
- ③ III
- ④ IV
- ⑤ V

問5 傍線部(2)「練習の三分の二がそんな感じだったらしい」とあるが、筆者はこの練習についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。

- ① 指揮者が自分のイメージを伝えるためにした夢のような話が、演奏者たちの想像力を刺激したという意味では、実りある練習になったはずだと考えている。
- ② 指揮者が演奏者たちの気分を和ませるためにした夢のような話が、演奏者たちにはうまく伝わらず、実りの少ない練習になってしまったと考えている。
- ③ 指揮者は自分のイメージを正確に表現する話をしたのだが、演奏者たちの想像力が乏しかったために、実りの少ない練習になってしまったと考えている。
- ④ 指揮者が自分の想像のおもむくままに夢のような話をしたため、演奏者たちは意味がわからずに混乱し、実りの少ない練習になってしまったと考えている。
- ⑤ 指揮者が演奏者の想像力を刺激するためにした話が、意味が不明であっても演奏者たちの気分を和ませたという意味では、実りある練習になったはずだと考えている。

問6 空欄 A C に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。

- ① A || 先進的 B || 抽象的 C || 印象的
- ② A || 先進的 B || 具体的 C || 印象的
- ③ A || 印象的 B || 具体的 C || 決定的
- ④ A || 印象的 B || 抽象的 C || 決定的
- ⑤ A || 決定的 B || 具体的 C || 印象的

問7

傍線部(3)「それはあり得ないことでもある」を受けて、ある生徒が次のように書いた。空欄

あ・いにあてはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを、後から一つ選びな

さい。解答番号は、。

カラヤンは、この「あり得ないこと」をあ。その結果、い。ができたのである。

- ① あ || あり得ないことは知らずに指示した
- ② い || イメージを重視する演奏者たちの職人気質に 대응すること
- ③ あ || あり得ないことは知らずに指示した
- ④ い || 自分のイメージを演奏者たちに伝えることに成功すること
- ⑤ あ || あり得ないと知っていて意図的に指示した
- ⑥ い || 自分のイメージを演奏者たちに伝えることに成功すること
- ⑦ あ || あり得ないと知っていて意図的に指示した
- ⑧ い || 具体的な演奏法にこだわる演奏者たちの職人気質に 대응すること
- ⑨ あ || あり得るかあり得ないかは意識せずに指示した
- ⑩ い || 具体的な演奏法にこだわる演奏者たちの職人気質に 대응すること

問8

傍線部(4)「カール・ベーム(一八九四〜一九八一年)がウィーン・フィルを率いて来日したときのこと」について、筆者はそれをどのような例ととらえ、その結果どのようなことを表しているかと考えているか。「失敗が……例で、音楽には……ことを表している。」という形式で、四十字

以内で書きなさい。解答番号は、。

問9 傍線部(5)「小澤先生はそれを、こんなふうに表現した。」とあるが、オーケストラの指揮に関する筆者と小澤先生の考えの説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、29。

- ① 筆者も小澤先生も、予想外の要素を取り入れながら指揮をすることによって、演奏者や聴衆にスリリングな緊張感をもたらすことが大切だという考えで共通している。
- ② 筆者も小澤先生も、演奏者を追い込んでスリリングな緊張感を与えることによって、演奏者の技術の向上を目指すことが可能になるという考えで共通している。
- ③ 筆者は演奏者を追い込んで緊張感を与えることを重視しているのに対し、小澤先生はオーケストラの演奏の崩れを救うことを重視している点で、二人の考えは対照的である。
- ④ 筆者は想定外の要素を取り入れることを重視しているのに対し、小澤先生は演奏者の技術の向上を最大にすることを重視している点で、二人の考えはかなり異なっている。
- ⑤ 二人とも演奏が成立するぎりぎりのところを目指すという点では共通しているが、筆者が即興性を重視し小澤先生はそれを排除するという点で対照的である。

問10 本文の内容に合致しないものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、30。

- ① 指揮者は指揮をしているとき、オーケストラの音を聞きながら、過去の音、現在の音、未来の音に関して瞬時に判断できなければ、いい音楽をつくることはできない。
- ② 筆者が指揮をするときに、演奏者の音を出すタイミングを明確に示さないのは、演奏者の想像力を発揮して積極的に演奏に参加することを期待しているからである。
- ③ ヨーロッパのオーケストラ相手に言葉の壁のせいで苦労した筆者は、練習のときに抽象的な指示に加えて具体的な演奏の仕方でも指示するようにしている。
- ④ 指揮者がオーケストラに綱渡りのようなことをさせるのは、はらはらしながら聴いている聴衆とは異なり、演奏者たちが常に冷静であることを知っているからである。
- ⑤ オーケストラの演奏中に音がずれるのは、それほど問題にするようなことではなく、それよりも演奏がただ安定しているだけであることのほうがもの足りないものである。

国語 (20230204)

解答一覽

大問	小問	解答 番号	正解
I	問 1	1	①
		2	④
		3	④
		4	③
		5	②
	問 2	6	⑤
		7	②
	問 3	8	②
	問 4	9	⑤
	問 5	10	④
	問 6	11	③
	問 7	12	①
	問 8	13	記述問題
	問 9	14	④
問 10	15	③	
II	問 1	16	①
		17	③
		18	④
		19	②
		20	⑤
	問 2	21	⑤
		22	④
	問 3	23	②
	問 4	24	⑤
	問 5	25	①
	問 6	26	③
	問 7	27	③
	問 8	28	記述問題
	問 9	29	①
問 10	30	④	